

「生きる」ということ

白水百合子

三十年ぶりに志賀島の海が見える墓地を訪れた。いや、七回忌に一度訪問したので、正しくは二十三年ぶりということになる。

ここには、三十年前、三十一歳の若さで天国へ旅立った友人、みさおちゃんが眠っている。当時、七歳の息子ゆうやと二歳の娘みくちゃんを残しての旅立ちだった。私の娘とゆうやは同じ年だったから、ゆうやはもう三十七歳になるはず。みくちゃんは三十二歳。みさおちゃんが亡くなった年を越える。みくちゃんはもう結婚しただろうか。母親似だったから、きつとみさおちゃんみたいな美人さんになっているだろう。腕白坊主だったゆうやも、もしかしたら結婚してかわいい奥さんや子供が居るのかも知れない。

「ねえ、みさおちゃん、どうなの？　そこから、ずっと

見ていたんでしょ？　ちょっとだけ教えてよ」と、そんなこんな思いをみさおちゃんに語りかけながら、私は三十年前の日々を思い出していた。

平成四年、夫の三回目の転勤は水郷の街、柳川だった。息子は初めての小学校、娘は初めての幼稚園をこの柳川の地で迎えた。

幼稚園の歓迎遠足は、水郷の街らしく、どんこ船での川下りだった。次々に船は出発するのに、私が乗る船だけが出発しない。どうやら遅刻者がいるようだとのこと。暫くして、ちよつと派手な服装で茶髪のサラサラヘアをなびかせながら、「すみません、家を出た途端、この子がうんちしたいと言ったもので遅刻しましたあ」と元気いっぱい女性のが、バタバタと船に乗り込んだ。これが

みさおちゃんとの出会いだった。

後日談だが、みさおちゃん曰く、この時笑っていたのは私だけだったそうだ。「みんなさ、遅刻してきたくせに、何この女？ って感じの目だったんだよ。そんな中、ゆりさんだけが笑って、ここにおいでって手招きしてくれたの。あんとき、私、どれだけ救われたか、知ってる？」と言うみさおちゃん。「ええ？ 全然そうは見えなかったよ。まるで漫才師みたいにウケ狙いしてるのかと思っただよ。事実、みさおちゃんが乗った衝撃で船が沈むかと思っただよ」と私。「もおっ！ ゆりさん、いじめんでよお。今は本当のお姉さんみたいに思っているんだからさ！」と、こんな調子で二人が仲良しママ友になるのに時間は掛からなかった。

それまでの転勤は社宅に住まねばならなかったため、私は夫の上司の奥様方とお付き合いに、へとへとだった。しかし、この柳川では社宅が無かったため、気の合ったママ友と気楽に付き合うことができ、私はみさおちゃんという妹ができたようで、とても嬉しかった。

みさおちゃんは、この柳川の地で第二子に恵まれた。志賀島の海で育った旦那さんが、海が来ると書いて海来と名付けた。私は、このつぶらな瞳のみくちゃんが可愛くてたまらず、しょっちゅう彼女の家と行き来をしてい

た。みさおちゃんの旦那さんの仕事は時々、夜遅くなることもあり、そんな時はよく、うちで一緒に夕食を共にしていた。

ある時、みさおちゃんが自分の家族の話をした。

「私の父親ね、女作って家出したの。私が高三の時。思春期真っただ中だよ。本当に許せなかった。一生、許さないつもり。母親も嫌い。父親から送ってくるお金があるからって働かないで、弟を馬鹿可愛がりするの。私だったらそんな元夫のお金なんて、絶対に受け取らないだから、私は高校卒業したらすぐ短大の寮に入って、保育士の資格とったんだ。で、今の旦那と出会って、すぐ結婚したの。殆ど実家には帰ってない。だから、ここでゆりさんたちと一緒に飯食べられて嬉しいんだ」

みさおちゃんの家族の話は知っていたので、私はみくちゃんのお世話をしながら黙って聞いていたのだが、珍しく夫がみさおちゃんに向かってこう言った。

「みさおちゃんのお父さんは偉いねえ。ちゃんと別れたお母さんに仕送りしてるんだ。俺の父親も女作って家出たけど、生活費なんぞ殆ど送ってきたことない。ちゃんと仕送りしてるだけ、みさおちゃんの父親は立派だと、俺は思うねえ」と。

すると、みさおちゃんは目を見開き、「えええ？ パパ

さんの父親もそうだったの？」と聞いた。

「そうだったんですよ！ まあね、そんな家庭はたくさんあると思うよ。勿論、比べるようなことではないけど、少なくともみさおちゃんのお母さんは、働かなくても生活は出来た。それだけでも、みさおちゃんのお父さんは最低限のルールは守られたと俺は思うよ。それに、みさおちゃんも親になったんだから、お金の大切さは分からなきゃだめだよ」

夫がそう言うのと、みさおちゃんは一旦下を向き、少し間をおいて、こう言った。

「……私、今まで、世の中で自分が一番不幸だと思っただ。でも、パパさんは私より不幸だったんだ。私、目から鱗というか、なんか力抜けちゃったよ。そっかあ、うちの父親はパパさんの父親よりはマシってことかあ。そうなるってパパさん、私より不幸でかわいそうかも？」

「おいおい、世の中で俺を一番不幸にするなよ」と少し笑いつつ夫が返すと、「あ、ごめんごめん！ そんなつもりじゃなくて、私の気持ちが悪われたというかあ、なんというかあ……。そうだね。パパさんの言う通り、お金のこと、私、ちゃんと理解するようにする！」と、みさおちゃんは素直な言葉を口にした。

私は、この時の夫とみさおちゃんの会話を今も鮮明に

覚えている。あまり口数は多くない夫が、この時は珍しく雄弁になり、みさおちゃんとの間に兄妹のような絆が生まれたのも、これから起こることへの予兆だったのかも知れない。

みさおちゃんはきつと父親が大好きだったのだろうと、私は思った。だからこそ、父親を憎むことでしか、気持ちの持っついていきようがなかったのかも知れない。夫も、そんなみさおちゃんに自分の辛い過去を伝えることで、みさおちゃんを楽にしたかったのだろう。事実、私が夫と同じようなことを言っても、みさおちゃんは耳を貸さなかつたが、夫の話には素直に頷いた。そんな不器用だけれど素直なみさおちゃんが、私たち夫婦にとつて、守ってあげたい妹のような存在だったことは間違いない。

そして、その日はいきなりやってきた。市民健康診断を受けたみさおちゃんに「乳癌」の疑いがある、と通知が来たのである。一人では不安だからついてきて欲しいと頼まれ、私は再検査の付き添いをした。検査を待つ間中、「大丈夫だよ。もしも癌でも、きつと初期に違いない。すぐに処置できるはずだから」と、今にして思えば本当に無責任な言葉で、私はみさおちゃんを励まし続けた。

それから暫くして、みさおちゃんの母親からアパート

まで来て欲しいと連絡を受けた。みさおちゃんの母親は数年前、縁あって再婚されていたが、みさおちゃんの検査入院のため看病をしに来られていた。

「みさおの乳癌はスキルス性といつて、もう助かることはないそうです。もって半年から一年の命だと宣告されました。旦那さんと話し合つて、みさおには黙つておくことにしました。子供たちにもです。なので、ゆりさんも、どうか黙つていてください。……でも、でも、まだみさおは三十なのに。どうして？ どうしてこんなことに……」

そう言つて、母親は泣き崩れた。私は茫然としてしまい、何の言葉も出ず、ただただ立ちすくんでいた。

私は怖かった。私の友情など、彼女が助かる前提でしか發揮できないモノであることを痛感させられた。私は夫に、みさおちゃんの乳癌のことを告げた後、支離滅裂なことばかりぶつけた。みさおちゃんのことよりも、自分の置かれた状況が怖くてたまらず、夫に転動願ひを出してくれ、とまで頼んだ。

「私、できない。みさおちゃんが亡くなるまでのお手伝いなんてできない。だつて私、本当の姉じゃないもの。親戚でもないもの。私、転動してこの地を離れたい。ねえ、転動願ひ出して。私、逃げたい……」と。

「お前の気持ちは分かるけど、みくちゃんの面倒を見る人が傍にいてくれないと、お母さんも旦那さんも困るんじゃないかと思う。俺たちは、できることをできるだけ、できる時にすればいい。お前も無理はしないでいい。でも、一番辛いのは、みさおちゃんだぞ」

そう夫は言つた。夫は実兄を早くに癌で亡くしているので、家族の思いは人一倍分かる。私は夫の言葉を聞きつつ、少しずつ心を落ち着かせていった。

みさおちゃんのお母さんは私に助けを求め、全てを話してくれた。何より、みさおちゃんに頼まれていたことは沢山あつたし、逃げ出すことなどできるはずもなかった。幸い、うちの息子はゆうやと、うちの娘はみくちゃん、よく遊んでくれた。ゆうやは、ただならぬ周りの様子に何かおかしいと思いつつも、うちにお泊りし、息子とゲームができることが嬉しかったようだ。ゆうやの楽しそうな笑い声が聞こえると、ホッとする思いだつた。私は、自分の子供たちのためにも気持ちを切り替えた。余命宣告されても助かった人は沢山いる。みさおちゃんも、きつと助かるに違いないと思うことにした。いや、そう思わなければ、みさおちゃんの前に立つことなどできなかつた。

そして、みさおちゃんが乳房の摘出手術を受けるため、抗癌剤治療をしている最中、阪神・淡路大震災が起こった。平成七年一月十七日、未曾有の大地震によって、神戸の街は崩壊した。その壮絶な震災の様子を、私はみさおちゃんの病室のテレビで観た。確か震災の翌日だったと思う。

みさおちゃんは抗癌剤の副作用で、だるくてたまらず、たくさんのクッションに上半身を投げかけていた。私はベッド脇の丸椅子に座っていたのだが、あまりの凄惨な様子に言葉を無くしていた。暫くして、みさおちゃんはこう言った。

「自然災害って本当に恐ろしい……。あつという間に、これだけのモノが跡形もなく壊されてしまうなんて……。健康だった人がこんなに沢山、亡くなってしまふなんて、本当に考えられない。世の中、一体どうなっていくんだろう……。ねえ、ゆりさん。健康でも災害で死ぬ人がいるなら、癌になっても助かる人は助かるよね？ 私、思ったんだけど、この地震で六千人の人が亡くなったって聞いて、中には私のように乳癌の手術を待っていた人も居たと思うんだ。私は幸せだね。癌になっても、ちゃんと手術できて、治療できるんだから、ありがたいって思わなきゃね。私、頑張るね。吐き気も痛さも我慢す

る！ 子供たちのためにも良くなってみせる！」

そんな前向きなみさおちゃんの言葉に、私が励まされた。事実、みさおちゃんは積極的に治療に取り組み、歯を食いしばって副作用に耐えた。そんな様子に、みさおちゃんは本当に助かるに違いない、と、私は自分の心に言い聞かせていた。

みさおちゃんの抗癌剤の投与は続き、彼女の綺麗なサラサラヘアは、ものの見事に抜け落ちた。そんなある日の夜、病院から電話があった。

「ねえ、ゆりさん、聞いて。今日、父親が病室に来たんだよ。ほんと、十三年ぶりだよ。すぐに父親って分かって思ったんだけど、髪が抜けた私の姿を見た途端、父親がおいおい泣き出したんだよね。しかも、号泣。廊下まで響いてさ。なんか、私の方が恥ずかしかったよ。かなりの時間、ずっと泣きっぱなしでさ。……結局、父親は何にも言わないまま、最後に分厚い封筒を私に押し付けて帰っちゃった。封筒には沢山の一万円札が束で入ってた。助かるなあ、って思ったよ。治療費、けっこうかかるしさ。あ、パパさんにちゃんと父親からのお金受け取りましたよ、って言つていてね。パパさん、偉い偉いって、私のこと褒めてくれるかなあ」と。

私は溢れる涙をみさおちゃんに悟られないよう、「うん、言っとく。きつと偉いって言うと思うよ。……みさおちゃん、お父さんに会えて本当によかったね」と返した。それから数日して、みさおちゃんが住むアパートに、父親から段ボール七箱分のおもちやが届いた。みさおちゃんは見舞いに来た私に、「ばかじゃないかと思うの。七箱よ、七箱。あんな狭いアパートに、七箱分のおもちやがどうしたら入ると思うのかしら。ほんと、ばかと思えない、あの人。ゆりさんもそう思うでしょう？」と言いつつ、その声は弾んでいた。口では「あの人」と言いながら、そんな父親の行為が嬉しかったのだと思う。それまでの時間を埋めるように父親は病院を訪問したが、程なくして、みさおちゃんの容態は徐々に悪化していった。

乳房を切除さえすれば助かると思っていたみさおちゃんは、一向に回復しない体力に苛立ちながらも、それでも、新薬でも新治療でも率先して受け入れた。家族には命の期限を告げておきながら、本人には新薬の了承をとるつづける病院側の手法は、到底、納得できるものではなかったが、みさおちゃんは「生きる」ことを諦めなかった。

みさおちゃんはお腹に三本の注射を打った。これは女性機能を永久に止める処置だった。この処置を受けた後、みさおちゃんは泣きながら、私にこう言った。

「……ゆりさん。私、もう女ではないんだよ。女性機能を止められてしまったの。どうしますかって聞かれても、やるしかないじゃない？ まだ子供が小さいから、死ぬ訳にはいかないもの。癌が転移したら困るもの。でも、女性でなくなることはとても辛い。吐き気も痛さも我慢できる。でも、まだ私、三十歳だよ。その私が生理も止まっちゃって、もう女性でいられなくなったの。こんなに、こんなに辛いことはない！」

泣き崩れるみさおちゃんを前に、私はやるせない思いでいっぱいになった。なんという仕打ちだろう。病院側も命の期限を告げるのであれば、せめてみさおちゃんを女性として、女性の身体のままでいさせてあげる方法はなかったのだろうか、と。

今から思い返すと、三十年前はまだ本人への告知は少なかった。病院側は、まず配偶者に告知する。最初の機会を逃すと、もう本人が知る可能性は殆どない。家族の大半はひた隠しにしようからだ。みさおちゃん本人の命なのに、旦那さん、みさおちゃんの母親、旦那さんの両親が、彼女の命について、またその治療について、

侃々諤々^{かんかんげつがく}と話し合う。私は家族ではないので口を出すことはできなかつたのだが、私だつたら嫌だと思つた。自分の命の期限は自分で知りたいし、治療法も、生き方も自分で決めたい。自分の命の治療について、たとえ家族であつても、自分以外の人に決めて欲しくない、この時私は強く思つた。

しかし、今でこそホスピスの選択などがあるが、当時は目の前の治療が最優先で、家族としては精一杯だつたのだ。家族もまた、みさおちゃんのことを思い、みさおちゃんのために全身全霊をこめて看病にあたられていた。家族ではない私が、何かを言える資格などなかつた。

女性機能を無くしてしまつたあたりから、みさおちゃんの気力は一気に衰えた。子供のためにと、どんな治療でも前向きに受け入れたみさおちゃんだつたが、度重なる心労と体力の低下により、水も受けつけることができなくなり、あつという間に危篤に陥つた。あわただしく呼吸器と輸液があてがわれ、みさおちゃんの意識は遠のいていった。乳癌の告知を受けてから、わずか十か月後のことだつた。

「もうこのまま、眠つたまま逝かれることになるでしょう」という医師の言葉を受け、家族はその辛く苦しい時

間を待合室で過ごすことになり、私もその場に居させてもらつた。その時に、旦那さんが言われた言葉が忘れられない。

「……なんでしようねえ。ぼくは眠たくなるんですよ。こんな心が辛く、悲しくてたまらないのに、のども渴くんです。眠れば、みさおが逝つてしまうような気がして、すぐに飛び起きてしまうのだけれども、また眠たくなるんです。そして水も欲しくなる。人間って、どういふ生き物でしょう。生きるって、なんだらう……」

憔悴しきつていた旦那さんは、そうつぶやくように言われると、また病室に戻つていかれた。

暫くして、旦那さんの大きな嗚咽が響き、彼女の時間が止まつたことを知つた。

お通夜の時に、私たち夫婦の横に座つた男性の横顔を見て、それがみさおちゃんの父親だとすぐに分かつた。

旦那さんから「親族席へ座ってください」と案内されるも、かたくなに断り、私たちの横に座られたみさおちゃんのお父さん。

「みさおの父親です。みさおが、ご夫婦に大変よくしていただいたとお聞きました。ありがとうございました。……いや、本当は、みさおの父親だと言える立場で

はありません。みさおを傷つけて病気にしてしまいました。私のせいです。私のせいで、みさおは病気になったのです。私が病気になればよかつたのに、どうして、どうしてみさおが……」と号泣された。私たちは、お父さんにどういふ言葉を掛けたらよいか分からず、ただ三人で泣いた。

次の日の葬儀の時も、お父さんは私たちと行動を共にされた。ゆうや、みくちゃんの前に立つこともなく、親族席に座られることもなく、ただ遠くから、みさおちゃんを見送られた。

葬儀も終わり、別れる時になって、私はお父さんにこう告げた。

「みさおちゃん、お父さんと再会したこと、とても喜んでいましたよ。お父さんから送られてきた沢山のおもちや、何度も何度も私に自慢していましたよ。きつと、みさおちゃんは、ずっとお父さんのことが好きだったと思います。お父さんも元気でいてくださいね。きつと、みさおちゃんもそう願っていると思います」

お父さんは私の両手をぎゅつと握り、顔を押し当るようにして嗚咽された。

「ねえ、みさおちゃん、こう言ってあげていいよね？」と、私は空を見上げ、心でつぶやいた。

旦那さんは、子供たちを連れて志賀島の実家に戻られた。子供たちも小さいし、旦那さんもまだ若いので、きつと再婚も視野に入れられるだろうなと、漠然と私はそう思った。それから程なくして、私たちも夫の四回目の転勤で柳川を後にした。

それから六年後、娘は小学校六年生になり、次の春が来たら中学生になろうとしていた。新しく出来上がった中学校の制服を娘に当てがっていると、ふいにみさおちゃんのことを思い出した。それは、病院での会話のやりとりで、まだ容態が悪化する前の話。

「ねえ、ゆりさん。ゆうやって中学生になれるかしら。あんなにやんちゃだから、小学校留年したりして！」と、みさおちゃん。

「小学校、留年は聞いたことがないなあ。いくら腕白坊主でも、中学生にはなれるでしょう」と私。

「なれるかなあ。私、見たいなあ、ゆうやの制服姿。詰襟がきちつと閉まつてる、あの中学校の制服。私、たった三十歳でがんになったんだからさ、あと六年、ゆうやが中学生になるまでくらいは神様も生かしてくれるよね？ 私、もう、いいんだ。あと十年生かしてくれたら文句言わない！ だから、見えるかなあ、ゆうやの制服

姿。見たいなあ」

そんなみさおちゃんの言葉が頭に浮かび、ふとカレンダーを見ると、みさおちゃんの命日が近かった。それは七回忌の命日。私はお墓参りに行くこうと思つた。旦那さんの実家を訪ねる気はなく、ただ、みさおちゃんが眠る所にお花を添えに行こうと思ひ立つた。

博多駅で白い百合の花を買い、博多港から志賀島行きフェリーに乗った。そうして志賀島のターミナルに降り立つた時、私を見る視線に気がついた。それはターミナルの横でたむろしていた少年野球チームの中に居た、ゆうやだった。すっかり大きくなつていたが、やんちゃそうな笑顔はそのままで、すぐにゆうやだと分かつた。

すると、ゆうやは、私が来たことを父親に告げに走り、結局、私は実家にお参りさせてもらうことになつた。でも、なんだか、とても様子がおかしい。旦那さんもご両親も皆、私に対し、びつくりしたような、驚いたような視線を送られるからである。

「驚きました。今日、ゆりさんがここに来るなんて、とてもびつくりしました。実は、私は二年前にお見合いをして、再婚することが決まりました。子供たちもその人にとつてもなついています。でも、私とその再婚相手に、籍を入れるのは、みさおの七回忌が終わつてからにした

い、と言いました。それが、みさおに対する最後の私の思いだからです。そうしたら七回忌の今日、ゆりさんが来られたという訳です。多分、両親もびつくりしています。でも、これは、みさおが自分の代わりにゆりさんをここに来させてくれたのだと思います。ありがとうございます。みさおに報告できたような、そんな気がしています」

旦那さんの言葉に一番びつくりしたのは、私だったのかも知れない。でも、その話を聞き、「そうかあ。みさおちゃんが私をここに来させたのね。私に、ご主人の話を代わりに聞いてもらいたかつたのね」、そう思いつつ、みさおちゃんの写真に手を合わせた。

そして、私は旦那さんにひとつだけお願いをした。それは、中学校の制服を着た、ゆうやの姿を見せてもらうことだった。私があつて来ることはもうないと思つたので、せめて、ゆうやの制服姿を、みさおちゃんの代わりに見せてもらおうと思つたからだ。中学校の制服を着たゆうやは、腕白だった面影は残るものの、とてもりりしくて、頼もしく思えた。

八歳になつたみくちゃんは、みさおちゃんの面影が随所であり、まるでみさおちゃんが生まれ変わったように見え、私は思わず、みくちゃんを抱きしめてしまった。

みくちゃんは私のことを覚えてはおらず戸惑っていたが、私が手を離すまでの時間、そのまま置いてくれた。ああ、確かにここに、みさおちゃんは居る、そう私は感じた。

ゆうやの制服姿を目に焼き付け、みくちゃんをこの手に抱きしめた感触を胸に、私は志賀島を後にした。フェリーで博多港に戻る途中、空からみさおちゃんが「ありがとう」と言っているような気がした。

それから二十三年が経った。志賀島に行けない理由はなかったが、新しい家族の物語が始まるこの地はなんとなく遠慮していた。長い年月が経ち、私の子供たちも独立し、私たち夫婦もとうに還暦を過ぎた。今回、別件で志賀島に行く機会があり、またこうやって、みさおちゃんのお墓参りをする事ができた。今回は、ゆうやに偶然会うことはなかったが、三十年前のことを思い出す事ができた。

「生きる」ということは、自分が自分を「生かさせる」こと。どれだけ悲しいことがあっても、苦しいことがあっても、人は眠るし、水を飲む。人間の本能が、「生きて」いくことを後押しするのだ。よく、「こころ」と「からだ」は別のものだ、と言う。どれだけ心が悲鳴をあげ

ても、思考が止まってしまふほど傷ついても、人間の身体は「生きる」ことを決してあきらめない。人間とは、強い生きものなのだ。

これからも、私は自分のために、家族のために、一生懸命生きていくであろう。

みさおちゃんとの思い出は、私の人生において、辛くもあつたが、楽しく輝いたひとときでもあつた。みさおちゃんのキラキラした笑顔は、いつも消えることなく、私の中にある。みさおちゃんが経験できなかった人生の後半を、私はみさおちゃんの分まで堪能するぞ、と思つて過ごしてきた。

あともう少し、これからも自分なりに、自分らしく、みさおちゃんの笑顔と共に「生きて」いこうと、心に決めていく。